

スリランカ ―柔軟に受容―

荒井悦代

一八世紀から華僑らがスリランカにも居住し、布売り・雑貨商・中華料理屋（山東省出身）、歯医者（湖北省出身）などによくみられた。数は多くなかったので中華街が形成されることもなかった^①。その数は、独立以降減り続けた。他民族との通婚や、市民権がなかったこと^②による他国への移住、スリランカの国立大学に歯学部ができたためである。それが一九九〇年代以降、盛り返している。中国人ビジネスマンや労働者が入り込んでいくこと、スリランカが中国文化を受け入れていることが背景にあり、中国人と中国文化の存在感が高まっている。

●インフラ建設に中国企業と中国人

古くはバンダラナイケ国際会議場が中国の援助で建設された。日

本でいうと武道館か東京ドームのような、国際会議から見本市、展示会のできる会場となっている。多くのスリランカ人は、そのホールが中国からの贈り物であることを知っている。中国大使館はホールの向かいにある。キャンディとヌワラ・エリアを結ぶ道路も建設を請け負ったのは中国だ^③。建設中、中国人の労働者をみた覚えがある。お陰でキャンディからヌワラ・エリアへの細い山がちな道のりが拡張され、きれいに舗装されて、所要時間が一気に短縮し運転も快適になった。国内で最長というトンネルもスリランカ人を興奮させた。長さ二〇メートルに過ぎないが、ドライバーは窓を開けてこうやって声を出すと響いておもしろいんだ、と言って我々日本人観光客に真似してみると促した。

近年の南部ハンバントタの港の建設、北西部ノロッチヨライの石炭発電所は中国の建設によるものである。これらは内戦後の経済開発のシンボルの存在でもある。コロンボ近郊には、中国企業専用の工業地帯も建設予定である。北部でも鉄道建設や住宅建設が中国の事業者によってなされている。スリランカ政府は、中国の支援を経済復興に欠かせないものとみなしている。

しかし、中国は工事の際に中国人労働者を大量に引き連れてやってくるため、国内に雇用が生まれにくいという批判もある。ノロッチヨライでは近隣住民との間で対立も報告されている。その一方で、スリランカ社会による受容も生まれている。例えば、ハンバントタでJICAの行っている村落生活上向プロジェクトの例がある。六

○以上の農家が、港湾建設サイトで働く三〇〇人ほどの中国人労働者向けに、スリランカの通常のマーケットでは入手できない、チンゲンサイやチョイスサム（菜心）、カイラン（芥藍）や白菜などの中国野菜を生産・販売している。栽培方法にも留意しており、中国人にも好評らしい。農民にとっても通常の野菜よりも高く売れると喜ばれている。中国人労働者が去ってしまった後、国内で販路を拡大するためにカレー料理へのアレンジなども工夫されているようだ。

独立前からいた中国人が減少していると述べた。スリランカでは南アジアでは珍しく、現地資本のスーパーマーケットが発達したこともそれを助長した。スーパーの発達につれてそれまで雑貨などの小売業を営んでいた中国人は職を失った。なかには漢方やマッサージ業を新たに始める人々もいた。しかし、さすが中国人だと思わせるのは、スリランカの小売り・流通業にアドバイザーとして入り込む中国人もいたことである。現地でプラスチックやゴム製品などの製造販売を手がける企業が、自社製品以外の雑貨や食品もあわせて大規模な店舗で売り始めた際、

品物を中国から多く取り寄せたが、同時に店舗の作り方や仕入れに関するアドバイザーも中国人を取り入れたようである。筆者は一九九四〜九六年および二〇〇八〜一〇年と二回のスリランカ長期滞在を経験しているが、このスーパーマーケットの展開は目を見張るものがあった。確かに文具・工具・日用品や衣類に多くの中国製品がみられた。

●風水ブーム

中国人や商品だけでなく、文化も流入し、それをスリランカ人が受け入れている様が観察できる。風水は一説には一九九七年に導入されたという。どうしたらいい結婚相手と巡り会えるかとか、昇進するにはなんのアイテムがいいのか、お金が貯まりやすくなるようなインテリアのアドバイスなどがうけている。本屋には風水の本が並んでおり、新聞でもコーナーが設けられている。

しかし、スリランカには昔から占星術がある。占星術では生まれた日時を基にして結婚相手との相性をみたり、不運が続いたとき占星術師に助言を求めたりする。身につけるといいとされる宝石をあ

しらった指輪もある。友人は家のリフォームをすると、ついでにいい状況から脱却できるというわれ、適切な日時とリフォームのやり方をアドバイスされたことがあるという。

特に結婚の時には占星術に基づくホロスコープの突き合わせが必須であるほど生活に根付いているスリランカに、どうしてさらに風水の入り込む隙があるのか。

町を歩いていても、店やレストランでこれまでみたことのないものを見かけることが多くなった。ヒンドウの神々や仏陀の像や絵とともになぜか布袋さんがいるのだ。時に金色だったりするので目がくらむが、大きなお腹にこにこしたお顔なので間違いない。スリランカは、仏教、ヒンドウ教、イスラム教、キリスト教が混在するが、まさかこんなところで布袋さんに会うとは。布袋さんの英語名のひとつは「laughing buddha（笑う仏陀）」で、弥勒の生まれ変わりとも言われている。そうなので、仏教徒にとつては許容範囲内かもしれないが、ヒンドウ教のガネーシャ（象の姿をした神様）と一緒にまつられているのは違和感がある。

飾っている人々は風水ブームに乗っかって、何となく縁起がよさそうで商売繁盛にいいかも、という動機らしい。よくみると、招き猫なども置かれている。彼らは、どの神様であれ自分に何らかの幸運をもたらしてくれるアイテムなり助言ならば柔軟に受け入れるようだ。しかし、スリランカの人々は、店先に布袋様を置いたものの、この笑う仏陀の祀り方が分かっていない。スリランカ風水のウェブページのQ&Aを見ると、「笑う仏陀にはコインをお供えしなければならぬのでしょうか?」とか「笑う仏陀はどんなお願いをしたらいいんでしょうか?」「どこに置けばいいんでしょうか?」と様々な問いが寄せられている。

スリランカというところ、二〇〇九年に二〇年以上続いた紛争が終わったばかりで、シンハラとタミルが憎み合っていたイメージがあるかもしれない。しかし、この紛争は領土や自治権を求めるもので、宗教紛争ではなかった。スリランカにはいくつか聖地があるが、それらは仏教の聖地でもあり、同時にヒンドウ教の聖地でもあり、キリスト教の聖地でもあり、時にはイスラムの聖地でもある。

そこを訪れた人たちは、それぞれの神を静かに、時には賑やかにあげており、他宗教を排斥しようとはしない⁽⁴⁾。

国レベルで、経済的・外交面での恩恵をもたらし、個人レベルでも商売繁盛・家内安全をもたらしてくれる中国と中国文化をスリランカの人たちは柔軟に受け入れている。

(あらい、えつよ/アジア経済研究所 動向分析研究グループ)

(1) 中華街はないが、トリコンマリやゴールなどの海上交通の要所にはチャイナ・ベイやチャイナ・ストリートという名称が残っている。

(2) 二〇〇八年に市民権を付与する法律が制定された。

(3) 資金は円借款による。

(4) 二〇一二年四月、スリランカ中部の町で、仏僧らが主導してモスクを移動させようという動きがあった。それに対しては、国内からも大きな反発と疑問が寄せられている。